

Exchange Exhibition project

学生作品の相互交流展

ラハティ応用科学大学デザイン学部にて

富山大学芸術文化学部准教授 渡邊 雅志



オープニングの様子

趣旨

富山大学芸術文化学部とフィンランド共和国ラハティ応用科学大学デザイン学部は、2008年1月、「日本国富山大学とフィンランド共和国ラハティ応用科学大学との友好協力関係に関する協定書」第2項第1号に基づく学生作品の相互展示の実施に関して覚書を締結した。これは、2002年9月、高岡短期大学とフィンランド共和国ラハティ・ポリテクニク（現ラハティ応用科学大学）との間で交わされた締結内容が継続されている。

この覚書は、両学部間の学生作品の相互展示を促進し、異文化作品に触れることにより、学生の学習意欲を高め、美術工芸に対する幅広い視野を与えるため、また、地域の文化交流の一役を担うため締結されたものである。

実施方法

両学部間の学生作品の相互交流展は隔年ごとに交互に開催するものとする。開催期間は2週間程度とし、開催場所は受入学部に一任、開催時期は両学部の協議により決定することとしている。

開催実績

開催日：2002年9月19日（木）～9月21日（土）

内容：高岡短期大学学生作品相互交流展

会場：シベリウスホール（ラハティ）

開催日：2002年9月25日（水）～10月8日（火）

内容：高岡短期大学学生作品相互交流展

会場：ラハティ・ポリテクニク

開催日：2003年12月2日（火）～15日（月）

内容：ラハティ・ポリテクニク学生作品相互交流展

会場：高岡短期大学

開催日：2005年9月9日（金）～22日（木）

内容：高岡短期大学学生作品相互交流展

会場：ラハティ・ポリテクニク

開催日：2008年1月21日（月）～29日（火）

内容：ラハティ応用科学大学学生作品相互交流展

会場：富山大学高岡キャンパス

開催日：2010年11月9日（火）～18日（木）

内容：富山大学芸術文化学部学生作品相互交流展

会場：ラハティ応用科学大学

担当：武山良三、渡邊雅志、横山天心（搬入、展示）

秦正徳、高島圭史、新井浩（梱包、搬出）

出品作品（2010年度）

- 1 「自画像」 高見基秀（造形芸術コース）
- 2 「自画像」 山本ひかり（造形芸術コース）
- 3 「自画像」 小林和（デザイン工芸コース）
- 4 「自画像」 池田藍（造形芸術コース）
- 5 「自画像」 光本幸子（造形芸術コース）
- 6 「ちいさな野花のために」
白木美南海（デザイン工芸コース）
- 7 「象虫乾漆飾箱」 新谷仁美（デザイン工芸コース）
- 8 「補虫」 福永なお美（デザイン工芸コース）
- 9 「OWL 漆塗りスピーカー」
矢野翔子（デザイン工芸コース）
- 10 「葛蒔絵硯箱」 山田佳奈子（デザイン工芸コース）
- 11 「菓子の遊び」 西岡施海（デザイン情報コース）
- 12 「「おいしい」を表現する
ー豆乳野菜ジュース「cheer」の提案ー」
丸山陽子（デザイン情報コース）
- 13 「おみやげ開発 concept「神社」ーとおくを想うー」
矢木麻美（デザイン情報コース）
- 14 「コーヒーと家族のひとときー現代の生活空間における漆工品の役割とその価値の研究ー」
伊藤智子（デザイン工芸コース）
- 15 「編んだ金属線を叩いて生まれるかたち」
田中久美子（デザイン工芸コース）
- 16 「駅前地層」 酒井克弥（造形建築科学コース）
- 17 「境界空間ー郊外に暮らすー」
藤本章子（造形建築科学コース）
- 18 「影の様相」 松本玲子（造形建築科学コース）



作品のスピーカーから音楽が流れるエントランスの展示



ラウンジブースでの建築パネルの壁面展示



漆工芸作品の展示



絵画作品の壁面展示



漆工芸作品に合わせて展示台の天板を黒い紙で覆う



外光が入る場所では白の天板で展示台をそろえる



オープニングに集まるラハティの学生



ガラス越しの展示（作品12）



エントランスの展示（作品9、作品15）



漆工芸作品に興味をもつ学生が多かった（作品10）



外が見えるガラス越しでのパッケージ作品の展示（作品13）



金属工芸作品の展示（作品6）



センサーが反応すると動き出す作品（作品8）



ラハティの学生たちが惹き込まれるように鑑賞していた作品（作品7）



ラハティ応用科学大学キャンパス外観



木工機械室の風景、左奥が材料棚



金属加工専用の演習室



学内ホールでのラハティの学生作品展示風景

学内見学

展示に合わせ、ラハティ応用科学大学のキャンパス内を案内して頂きました。木工機械室、金属機械室など様々な加工室には専用の材料棚が整備され、清掃も行き届き、制作環境管理がしっかりしている印象を受けました。さらに素材別の加工室のそばにその素材専用の演習室が配置され、スムーズに作業が流れるように配慮されていました。学内のホールでは、家具、ファッション、ジュエリーなどの学生作品展示が行われており、その完成度と展示への意識の高さに刺激を受けました。

今後に向けて

今回の展示では、搬入時に作品の破損が確認され、作品梱包への配慮の重要性を改めて感じ、また、センサーで動く作品がうまく作動せず、事前の動作確認を念入りにすべきと痛感しました。セッティングは、ラハティで教鞭を執られていた児島宏嘉先生と本学からの3名の教員で朝から夕方までかけて行いました。現場の展示場所の状況を確認したあと、展示台を用意していただいたり、作品のスピーカーから音楽を流すために接続をしていただいたり、現場の状況に応じて臨機応変に対応していくものとなりました。搬出は、本学からの3名の教職員が行い、作品ごとに梱包の仕方が明記されている説明書が添付されていたので効率よく作業が行えました。

展覧会のオープニングではシャンパンが振る舞われ、賑やかな雰囲気の中でラハティの学生達はくい入るように本学の作品を鑑賞し、同じモノづくりを学ぶ者として、モノを介して意志や価値、興味や関心が通じ合っているようでした。この状況を間近に見ると、やはり高岡短期大学から続くこの相互交流展の意義は大変大きいと感じました。モノの価値は、異なる国、異なる文化であっても力をもって伝わることを実感しました。今後はこの“実感”をどう活かしていくのかを考える、次のステップの時期にきているのかもしれない。